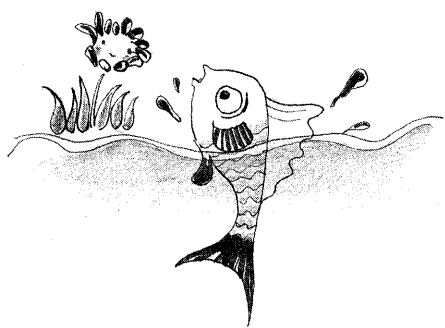


たまご

松井とし



十五年前の春、私は一つの選択を迫られていた。当時、研究者のたまごとして通い慣れた大学で、自由な生活をしていた私のところへ、幼稚園の現場での仕事の話がふってわいた様に持ち上がった。私は、大いに悩んだ。なぜなら、私の知る限り幼稚園の現場はひどく混沌とした所であった。さまざまな保育観、保守的で狭い女の園、お絵かきやおゆうぎと称される保育内容等。これらの全てが私を不安にした。が、もっと深いところで私は悩んだ。実のところ、私は子どもがあまり好きではなかったのである。

そもそも児童学を専攻したのは、将来子どもを育てる時に役立つだろうからといった、あまいで甘い考えに依るものだった。こんな風に迷い込んだ児童学の道は果てしなく、求

めれば求める程、いつ迄たってもボールをかぶったまま、私はなかなか真の児童学の意味するものと出会えなかった。

研究室時代、付属幼稚園の子どもを観察するゼミがあった。まわりの人たちは、ささいな子どもの動きをとり上げては、楽しそうにいろいろな角度から現象学的に考察する。心の奥深く、子どもが苦手であるという負い目を抱く私は、その場にいる事が苦痛だった。では、何故、いばらの垣根を越えてまで幼稚園という不可解な現場へとび込んだのかと言え、たまごはまさに割れる寸前だったのである。その上、それ迄避け続けてきたにもかかわらず、なお、保育者への道がひらかれた、と運命的なものを強く感じたからであった。

今にして思えば、たまごの私自身に存在していた幼児性が、子どもの存在と反発し合っていたのかも知れない。多くの子どもたちとの生活によって、未熟だった私の幼児性は磨かれ、今では子どもの心に共感し、理解する際の根幹をなしている。

あの時の選択は、私の生き方、そして人生をも変えることになった。遠まわりの人生ながら、たまごの頃の全てが生かされている現在の充実を、感謝せずにはいられない。

(神奈川県立横浜幼稚園)